

たま通信 (番外編)

平成17年6月3日

医療法人いちろ会

小児クリニックたまなほ

日本脳炎7クチン接種の突然の中止について

5月30日(月)に厚生労働省が突然「日本脳炎7クチン接種」の推奨を中止すると発表しました。前日の29日(日)には那覇市では普段どおり集団接種をしておりました。前ぶれなく突然のことで医療現場も寝耳に水でした。

昨年、日本脳炎を接種した中学生が、その後急性散在性脳脊髄炎(きゅうせい・さんざいせい・のうせきずいせん、ADEM)で重症になったことを国が重要視したための措置です。

日本脳炎は脳に障害をもたらす病気で、死亡率は20%で、後遺症は45~70%という危険性の高い感染症です。日本では7クチンの定期接種により1966年の2,017人をピークに徐々に減少し、1992年移行は毎年10人以下です。

但し、1991年には沖縄北部で演習を行なった米兵が、日本脳炎に罹患し意識消失のまま米国本国に搬送された事実があります。その後数人の患者が出ており、米国は沖縄を含む東アジアに展開する米国軍人軍属に対する日本脳炎7クチン接種の勧奨をしています。

日本脳炎ウィルスは、増幅動物であるブタの日本脳炎ウィルス抗体価の上昇から、**感染蚊が日本各地特に亜熱帯の沖縄には常に存在すること**を認識しておかなければいけません。

日本脳炎7クチンは年間約400万人に接種されています。平成3年以降14例のADEMの報告があり、その内5例が重症でした。単純計算で400万人に1人(重症は1000万人に1人)の副作用の確率です。 もし7クチンがなければ国民の数%が感染し、その1000人に1人が発症し、さらにその20%が死亡する計算です。

7クチンの副作用ばかりが問題視され、もし流行したら国民への不利益はもっと拡大すると思われます。1970年代にDPT(三種混合7クチン)が副作用のため一時的に中止されましたが、それまでほとんどなかった百日咳が、その後の5年間で流行し150人の子供たちが死亡しました。今回、予防接種の副作用と接種しないで実際にかかる危険性と、常に天秤にかけて個人の責任で選択しなくてはなりません。